幼児教育と小学校教育をつなぐ 架け橋プログラムとは

無藤 隆

(白梅学園大学)

架け橋プログラムは何をしようとしているか

架け橋プログラムは、

- そのつながりを資質・能力の伸長とその具体化としての「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」により進める具体化、
- 芽生えとしての幼児教育とその小学校低学年での自覚的学びへの発展としての接続、
- 5歳児と小学校1年生の2年間への焦点化、
- 代表的なカリキュラムとしての活動・単元の検討から広げていく方略、
- 幼稚園・保育所・認定こども園の共通性に着目、
- 自治体を単位としてその全ての園・学校、つまりは全ての子供を対象とする網羅化、

などの特徴をもつ。

そこで、必要なことは、

- 1) 各園・各学校、各実践者がその視点で自分たちの実践を見直すこと、
 - 2) 幼児教育の意義をその架け橋期の活動から深めること、
 - 3) 小学校の特に低学年教育について幼児期からの発展として、自覚的で同時に探究的な在り方を明確にすること、
- などである。

主体的・対話的で深い学びに向けて目指す 子供像を具体化する

1) 目指すところは主体的・対話的で深い学びを実現していくこと

主体的とは学習主体が興味と意欲をもってその事柄に関わり取り組もうとすること。

対話的とは他の学習主体の取組と共に学びを多角的に広げること。

深いとは対象となる事柄を詳しく知り、その背後の世界とそこでの成り立ちへと探究を進めること。

2) 幼児教育においては、

子供がやりたい意欲をもってその目指すところに向けて取り組み(幼児期の学びに向かう力等)、

仲間と話し合い、考え、工夫していき(思考力等の基礎)、

身の回りの環境の特徴に気付き(知識・技能の基礎)、

そこに見出されることやそこで作り出したいことを追究して、

難しいことに挑戦し解決するためにそこに生じている物事の特徴の理解を生かしていく。

その過程において、身の回りの出来事を理解し、そこでの達成したいことを発見して解決を試みて、諦める

ことなく工夫していく姿を実現していく。(資質・能力の育成を図る幼児教育)

それが小学校の授業での主体的・対話的で深い学びへと至る学習活動に発展する。

3) 小学校においては、

各教科等の基盤として資質・能力の成長を置き、

その具体的な表れとしての「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の進展を可能とする活動を授業として構想する。

その上で、各教科等の授業において、幼児期の萌芽的で関心・感覚レベルの活動を発展させ、より自覚的で分析的で追究的な学びへと向けていく。

4) 架け橋プログラムとは、

幼児教育の質を向上させ、それを小学校の学びの基盤として働くようにする。

幼児教育として体験における芽生えとして現れ、そこでの関心・感覚としての育ちを小学校での基盤的活動として発展させると共に、個々の授業の単元の基礎としていく。

それが小学校の始まりの1年間の授業の在り方を個々の子供にとって意味のある生き生きとした学びの生じる場とすることにつながっていく。

スタートカリキュラムのポイント

小学校の始まりのスタートカリキュラムでは幼児期の学びを生かして小学校での学習活動につなぐ。

1) 出身の園で多くの経験をし、様々なことについて学んできている。ただし、その学びの経験は園により、かなり異なることもある。

①10の姿が発揮しやすい環境・活動を用意する。

②小学校に適応するための指導を新1年生の経験や意見を聞きながら進める。

③各教科等の学習の始まりは10の姿の活動の発展から移行していく。

④出身園や生まれ月その他の個人差が大きいため、その様子を見定め、活動を調整して、対応を進める。

2) 低学年の教育を生活科を中心に他教科等へと広げるために、合科的・関連的な指導を増やし、体験と言葉を結びつけ、徐々に自覚的な学びへと導く。

架け橋期のカリキュラムを開発するためのいくつかの方略

1) 幼小の交流から

- 共に互いに保育・授業を参観し、そこでのやり方や考え方、幼稚園教諭・保育士・保育教諭、小学校教諭等の準備や配慮、また子供の学びの様子を参考にして取り入れる。互いにそれぞれの時期にふさわしい教育を目指しているのだから、そのことへの敬意をもつことが基本である。
- 幼児教育側も小学校教育側もそれぞれの質を高めていくために架け橋プログラムを進めるのだから、その自身の改革を進めたいということを鮮明にする。
- プロセスとしての資質・能力の捉え方を幼児期にも小学校1年生の時期にも適用することでつながりが見えてくるだろう。感じ気付き、考え工夫しながら、好奇心を働かせ、意欲をもってそこに取り組み、追究する活動を幼児から小学校1年生へとつないでいく。
- 5歳児と小学校1年生で一緒に活動をすることで、それぞれの特徴がどうつながるかが子供にも幼稚園教諭・保育士・保育教諭、小学校教諭等にも見えていくだろう。
- そこでの学びのプロセスを共有して、幼児から小学校1年生への向上のポイントを捉える。スタートカリキュラムについて、幼児教育側の参加を広げて話し合いを拡大する。そのスタートカリキュラムの発想をその後の各教科等の教育へと生かし、広げる。

2)特に幼児教育として行うこと

- 幼児期の学びを「芽生え」として捉え、そのいくつかの活動について、いくつかの姿とそこでの芽生えとなる学びが見られることを記述し、それを発展させることが小学校の各教科等の学びの在り方へと発展する。
- 5歳児段階では子供にとって学びの自覚化への活動を開始する。こういうことが分かったという発表や記録作りを行い、その後の活動の発展に向けていく。
- 幼稚園教諭・保育士・保育教諭等と子供たちが一連の活動をドキュメンテーションとして共に作り、それを特に5歳児の活動での学びの焦点化・自覚化としていく。それを小学校に伝えるようにしていく。
- 幼児期の一つの活動を、10の姿のいくつかの現れとして捉え、そこからさらに伸びていく子供のいろいろな姿を思い浮かべ、それらとの関連でその活動を吟味すると、小学校でのいくつかの各教科等の授業とつながることが見えてくる。その構想を描いて、その始点から幼児教育の活動を見直してみよう。
- 10の姿の一つ一つについて、多種多様な多くの活動に現れるはずなので、それぞれの特定の姿の現れを拾い出し、それを整理して、幼児期の学びとして表現する。その「拾い出し」集を小学校に伝えることもできる。

3)特に小学校1年生として行うこと

- 小学校の単元について、その芽生えを幼児期に探して、つなぐ。どの単元についても、その内容などに関連して、どんなことを幼児期に活動していたかを記すようにする。
- 小学校の各教科等の何かの単元を取り出し、それについて幼児期の関連する活動とそこでの関連する10の姿の1つ2つの姿を参照し、各教科等の単元で生かす。例えば、国語科の絵本教材と絵本の読み聞かせなどでの言葉による話し合いの姿との関連。あるいは算数科の足し算・引き算と幼児期の数量の関心・感覚との関連。
- 生活科を中心に合科的・関連的な指導を進め、幼児教育での活動と成果を生活科から各教科等へと広げていく。
- そういったときの話し合いを通して、特に幼児期の幼稚園教諭・保育士・保育教諭等と小学校教諭等が、子供の在り方について、またそれぞれの学びの特徴について、さらに指導の共通性と違いとを論じる。また時期による違いを共通性の発展としてのつながりとして見直す。
- 幼児期の10の姿の発展は小学校1年生の生活に近い学習活動(例えば放課後、国語科の読書活動、特別活動での学級活動、生活科の探究的活動等)によく出てくる。それを検討して、さらに他の各教科等との関連を作る。

小学校での各教科等とのつなぎ方

各教科等とのつなぎ方の特徴がある。こう考えると、小学校1年生の1学期のみならず、2学期・3学期でもつながりがあることが見えてくる。いずれも10の姿に述べられており、資質・能力の芽生えを大事にしてつなぐことが肝心である。

- 生活科はかなり直結した活動が幼小に見つかるだろう。
- 図画工作科も幼児教育での多くの造形活動の発展となる。
- 音楽科はきちんとした歌い方をしていないとしてもいろいろな機会に歌うのであるし、また音遊び・音楽遊び・楽器遊びなどを行っているので、それを生かす。
- 体育科は特に運動遊びに注目する。その技術より、楽しみ方や工夫の仕方、身体のしなやかさに着目する。
- 特別活動では、幼児の話合い活動を、クラスとしてまた折りに触れてグループの遊びで行っていることを伸ばしていく。
- 道徳科では幼児期の道徳性の芽生えや規範意識の芽生えを生かせる。
- 国語科では絵本の読み聞かせや言葉遊び、絵本や記録の製作などの活動から発展できる。
- 算数科では(幼児に算数的な活動はないが)様々な活動において数量的経験(数える、比較する、10の単位、大きな数等)がなされており、その発展をどう小学校1年生の筆算の基礎的な算数科の学習活動に生かす。
- 理科・社会科は生活科を通してつながりがあり、幼児では科学への芽生え、家族や近隣への関わりの活動が増えてきているので、それを生かす。

体験の多様さの生かし方

一つの小学校にいくつもの園から子供がやってくるのが特に都市圏では多い。それをプラスにどう生かせばよいか。

- 資質・能力と10の姿に戻ることによって具体的な内容としては違っていても共通性が見えてくる。
- 一律の内容的な共通性から出発するのではなく（それは実はどういう場合にも成り立っていない）、子供により内容的に違う経験をしていることをプラスとして生かすよう工夫する。（それが「個別最適な学び」と「協働的な学び」へと向かうための基本となる。）
- まず探究的に学ぶための資質・能力に着目して、それを引き出す活動から始める。
- 先に知っている子供に説明をさせ、質疑をして、全部の子供を巻き込む。
- 話し合い活動から教師がそれを拾い上げ、整理し、説明や発問を加え、単元の学びへと向かう。
- どの子供にも得意な、好きな、こだわりのある活動があるだろう。それを見つけて生かす。

4)組織として

- 組織作りを進める。各園・各学校に担当者を置き、担当者を中心に全校・全園体制を作る。
- 架け橋期のカリキュラム開発委員会を作る。地域へと広げるため教育委員会などが主導しつつも、児童福祉等の担当部局などが積極的に加わる。
- 小学校学区などを単位として、そこに全園が多少とも関われるようにする。その参加を自治体側が働きかける。
- 幼児教育センター等による援助を進める。架け橋期のコーディネーターなどを派遣する、等。
- その委員会で、架け橋プログラムのガイドブックを作り、また幼保小の合同研修を広げる。
- 互いに保育・授業を見ることを行う機会を増やし広げる。それを基に話し合う機会とする。

5) 保護者・地域との協働から

- 保護者の理解を得る。幼児教育の遊びの中にある学びと、それらが多種多様な芽生えとして出ており、小学校につながることを具体的に伝え、見てもらう。
- 小学校への準備として必要なことを幼児教育側と小学校側が協議して、そこから伝える。
- 小学校としてその低学年で目指すところを保護者に伝え、それがいかにして幼児教育からの発展となるかを明示する。
- 一人一人の学びへの能動的な関わりとそこでの気づきと工夫、そして学校を好きになることが小学校教育全体の基盤となるのだと小学校1年生の授業の在り方から見せていく。
- 幼児教育でも小学校教育でも保護者・地域からの情報・資料・援助が保育・授業で活用できることを伝え、随時、それらを使った活動を行う。
- 地域に出て行き、その「探検」を行う中で、地域の人々の活動の意義を具体的に知る。
- 個別の保護者の期待や不安に対しての応答を随時行い、共に考える。
- 架け橋プログラムに取り組むことで、何より幼児教育と小学校教育が共に、子供たちが園・学校に通うことが好きになり、その充実した意欲と気づきと工夫に満ちた活動が営まれ、そのことから学力の基盤が形成されているのだということを伝える。

架け橋プログラムを進める基本方針の要点とは

- 教育委員会など自治体で中心となる必要がある。
- 児童福祉等の担当部局等すべての幼保・小学校の担当部署が協力する。
- 小学校・中学校区などを単位としてすべての幼保小が定期的に集まり、共に話し合いまた研修を受ける体制を作る。
- 幼児教育側と小学校側が子供の保育や授業での様子を例として挙げて、それについて一緒に議論し考える場を年に複数回設定する。
- 幼児教育また小学校教育の主な教科等・単元・活動を取り上げて、どうすればよいのかを一緒に討議する。
- それぞれが相手のやり方がその時期として意味があると捉え尊重すること。同時に、自分たちのやり方をそれぞれが変革していこうという姿勢を取る。
- 目指すのは子供の成長・学びの連続的なプロセスを促進することにある。

子供にとって楽しい、面白い、有意義な園・学校にしていこう

- 子供が毎日通うのがワクワクする園そして小学校にしていこう。
- 日々、今日も面白かった、こんなことを遊んだよ、学んだよという思いで帰って行くようにしよう。
- 楽しさ、面白さ、充実感があり、そこから遊ぶこと・学ぶことの大切さに目覚めていく。それが子供の学びとなるのである。
- それは幼稚園教諭・保育士・保育教諭、小学校教諭等にとっても同じことだ。毎日、保育をし、授業をすることが楽しく充実したものになり、そこでどう工夫するかを楽しむにできるようになってほしい。みんなでそういう園・学校にしていこう。
- 子供のすることの面白さを見付けること、それが架け橋プログラムのキモとなる。
- それが子供の不登校(の始まりとして登校しぶり)を減らし、学力の基盤を形成する最も大事なことなのである。